

はかなくて今宵明けなば行く年の思ひ出でもなき春にやあはなむ

源実朝

『金槐和歌集』冬の部、最後の歌。今夜が明けたら新しい年となる大晦日の感慨を詠んだ作。「春にやあはなむ」をどう解釈するか、研究者のなかで一首の読みは色々に分かれるという。

まず「なむ」を願望を表す助動詞として受け取る場合。

『コレクシオン日本歌人選 源実朝』において三木麻子氏は「あつげなく今宵が明けてしまうのならば、去って行く年がはかなくという思いもなのまま、新しい春を迎えたいものだ」と解釈している。

次に、否応なく会ってしまうという意味の「あひなむ」の誤りと見る場合。『情報編集力をつける国語』のなかで橋本治氏は「今年一年なんの思い出もなかった。『なんの思い出もなかったな』と考える新年が来る」と解釈する。ふたつの読みに現れる実朝像はまるで別人。かなりギャツ



プがある。同じ「あひなむ」派でも、「新潮日本古典集成 金槐和歌集」で樋口芳麻呂氏は「去って行った年の思い出をなにも留めていない春に逢うことになるのだろうか」として、橋本氏の説に「新年になって旧年のことを忘れ去ってしまうという軽薄さをうとましく思っている」という心理の屈折を加えて読み解く。

ここに「はかなし」という言葉の沃野を見る思いがする。移ろう四季を愛でながら、不変の美を願う。叶わない矛盾を追求した先にたどり着く無常観は、王朝和歌がゆたかに培った心の地平であった。源氏の武将でありながら、古典和歌を学び、愛した実朝という側面から考えれば、王朝和歌的な感慨を引き継ぐ三木氏の解釈が自然なように感じられる。一方で、武家の目から見れば貴族の京文化を好む軟弱の徒、お飾りの将軍と見なされていたともいわれる実朝の精神の孤独に着目すれば、橋本氏や樋口氏の解釈により説得力がある気がしてくる。

実朝ははたして新しい年を待っていたのか、否か。

(小島 なお)